

医学部専門予備校 クエスト 解答速報

順天堂大学（医） 英語

試験日 2月3日（火）



【講評】

形式、難易度ともに例年通り。マークが 75% を上回ってれば、あとは 75% であろうが 85% であろうが大差なく、勝負は英作文。200 words はマストで書き、欲を言えば 250 words 書けるとよい。今回の英作文は音楽でも文学でも、今までに何かしら熱中した経験があれば書きやすかったと思う。

順天堂の場合はまずは英作文のお題に目を通し、書けそうならばすぐに書いてしまう。すぐに思い付かなければ長文を読み始めて、読んでいるうちに何か案が降ってくるのを待つ、という感じになると思う。ここが、与えられた長文を参考にする必要のある日医、慈恵との大きな違いである。

1

問 1

(1)2

(2)3

(3)1

(4)3 a good fortune の対比としてマイナスを帯びた単語を選ぶ

(5)1 justice 「正義」では、正義の鉄槌が下り、罰を受けるという内容に戻ってしまうので×

問 2

(1)2

(2)4 人々は典型的な比喩的解釈と、行動とその影響という外的な側面を習うとある。一方で人々に欠けているのは、登場人物が内的に感じている罪の重さを推し量ることである、とある。1.の選択肢は悪くないように思えるが、内的な影響と外的な影響の区別をつけずに consequence としているので△

(3)1

(4)3

(5)2

2

問 1

- (1)3 ¶6でpursueの言い換えとしてseek, look forといった表現があるので、  
深読みして2.ではなくて素直に3。こういう類の問題が一番心がざわざ  
わするので頑張って割り切って進みたい
- (2)2
- (3)4
- (4)1
- (5)4

問 2

- (1)2 「退屈」が人々の「興味」を引いているから irony なのである
- (2)3
- (3)1 退屈の持つネガティブな一面を描いているパラグラフである
- (4)2 日常で満足できなくなってしまうという記述を参考にする
- (5)3 全体のパラグラフにうっすらと関わっていく選択肢を選ぶ。1.は良い側  
面しか触れていない選択肢なので選ばない

3

問 1

- (1)2 1. steady は「着実な」、という意味なので, alarming の持つ勢いよく増えるニュアンスが出せない
- (2)1 notice には「注目」という意味のほかに, 「警告」という意味もある
- (3)4 取って代わることはできないが, の文脈から選べる
- (4)4
- (5)2 直後の to be sure は目的の不定詞であることに気がつけば解ける

問 2

- (1)3 causal 「因果の (cause の形容詞)」と casual 「気楽な」を間違えないこと！
- (2)4
- (3)2
- (4)3 4.の選択肢は断言しすぎているのがおかしいと気がつき, 消したい
- (5)1 1.は mental に限定しているのが怪しく, 4.はちょっとしか語られなかった dangers が benefits と同格で扱われているのが怪しい。どちらも完璧なタイトルとは言えないように思えたが, 本文最初で匂わされていた physical の要素は後半にかけて全く触れられなかった点を考慮し, 1.とした

4

問 1

- (1)3
- (2)1 単語そのままの意味で解ける
- (3)1 bat「コウモリ」ではなくて insect を修飾していることに注意すれば容易
- (4)4 有名な接頭辞 mal と adaptive の組み合わせから気がつける
- (5)3

問 2

- (1)1
- (2)2
- (3)3
- (4)3 ¶11 を参考にするとマイナスが大きいのは 1.か 3.。そして ¶9 には「歩道や上空に光の塊を投げない」とあるので、これの逆で「歩道や上空に光の塊を投げる」選択肢を選ぶ。coming from the side では、歩道から光が出ていることになるので×。よって下から上に青い光を投げる 3.
- (5)4

5

It is often said that throughout human history art has influenced our species in a million different ways. These influences can be talked about in broad and smaller terms. In this essay, I will start with my own experience with an literature work and share its personal implications for my way of life so far.

The concept of art aims at countless numbers of subcategories, such as fine arts, music and so forth. The fine definition of it aside, my first experience of the kind must have been with literature, a famous novel by Haruki Murakami: *Norwegian Wood*. I happened to see the book — more precisely, the two volumes of the work — lying on the second shelf from the top in a bookshelf in my house. That was my second year as a junior high school kid. At first their beautiful covers little more than attracted my eyes, but then I was fully engrossed in reading them. The story is all about the physical death of some people and the spiritual bounce back of those left by them in an ordinarily daily context. The main character is always the first one to be left and feel grave sorrow by the mourning.

In the midst of the story comes his famous phrase: Death is not beyond, but within our daily lives. This gave my younger self some ambivalent feelings, that is, appreciation for all around me and the fear of inevitable farewell to them someday in the future. Since then, I have tried to make the most of any given opportunity to interact with others so as not to forget the lesson: Death is not beyond, but within our daily lives, and in my words, today could possibly be the last day to spend time together with them. This attitude nurtured through reading the work in my youth will lend itself to my career as a doctor, I would think, for being a doctor should require the qualities: respect for life and moments.

【訳】

人類の歴史を通して、芸術は数えきれないほど多様な形で私たちに影響を与えてきたと言われている。そうした影響は、大きな視点からも、より身近な視点からも語ることができる。このエッセイでは、私自身のとある文学作品との体験を出発点として、それがこれまでの私の生き方にどのような個人的意味を持ってきたのかを述べたい。

芸術という概念には、美術や音楽など、無数の下位分野が含まれる。厳密な定義はさておき、私が最初に出会った芸術は文学だったに違いない。村上春樹による有名な小説『ノルウェイの森』である。私はその本——より正確に言えば二巻本——が、家の本棚の上から二段目に置かれているのを偶然目にした。当時、私は中学二年生だった。最初は美しい表紙に目を引かれたただけだったが、やがて私はその物語にすっかり引き込まれていった。物語は、何人かの人々の肉体的な死と、残された人々がごく日常的な生活の中で精神的に立ち直っていく過程を描いている。主人公は常に「残される側」となり、深い喪失感と悲しみを味わう。

物語の中ほどで、主人公の有名な言葉が登場する。「死は彼方にあるものではなく、私たちの日常の中にある」。この言葉は、若かった私に相反する感情を抱かせた。すなわち、身の回りにあるものすべてへの感謝と、いつか必ず訪れる別れへの恐れである。それ以来私は、他者と関わるあらゆる機会をできる限り大切にしようと努めてきた。その理由は、この事実を自分に思い出させるためである——死は彼方にあるのではなく日常の中にあり、私なりに言い換えれば、今日が誰かと共に過ごせる最後の日になる可能性もあるのだ。このような考え方は、若い頃にこの作品を読んだことによって育まれたものであり、将来医師としてのキャリアにも生かされると私は思う。なぜなら、医師であるということは命や瞬間への敬意という人間性を求めるはずだから。